

美術の窓(121)

成瀬先生と司馬江漢

大和文華館館長 浅野秀剛

江戸時代を代表する洋風画家・司馬江漢(1747～1818)が若い頃に錦絵(完成された多色摺浮世絵版画)や肉筆画の美人画をかなり描いていたことは広く知られている。長く大和文華館に勤められた成瀬不二雄先生が司馬江漢研究の第一人者であるということも、日本美術を専攻する者で知らない人はないと思う。私が大和文華館に勤めはじめて気にかかっていたのは、浮世絵が専門



司馬江漢筆「春重」署名「春信」印「美人図」(大和文華館蔵)

の私が、江漢研究に何か資することはできないかということであった。江漢の研究書を読み返してみると、さすがに成瀬先生の江漢の浮世絵に関する見識には説得力がある。

江漢は、自身と浮世絵の関係について、晩年に書いた随筆『春波楼筆記』のなかの「江漢後悔記」で次のように述懐している。

其頃鈴木春信と云ふ浮世画師、当世の女の風俗を描く事を妙とせり。四十余にして俄に病死しぬ。予此にせ物を描きて板行に彫りけるに贗物と云ふ者なし。世人我を以て春信なりとす。予春信に非ざれば心伏せず、春重と号して唐画の仇英或は周臣等が彩色の法を以て吾国の美人を描く。

この文は事実そのままではなく、江漢が自分に都合がよいように多少脚色していると思われるので、全面的に信じることはできないが、明和(1764～72)後期から安永(1772～81)初期の様式を持つ錦絵の美人画に「春重画」の署名を持つ作品が存在し、またそれらと類似する「春信画」署名の錦絵美人画のなかに、鈴木春信が描いたとは考えにくい一群の作品がある。それらの作品は、今日では、春重すなわち司馬江漢の作品と考えられている。江漢の浮世絵についての最大の疑問は、果たして江漢自身がいうとおり、春信没後に、「春信画」署名の贗物の錦絵を描いた後、「春重画」署名の錦絵を描いたのかどうか、それと、「春重画」署名の肉筆画との関係をどう考えたらいいのかという

ことである。

成瀬先生の見解は、江漢は春信門下の浮世絵師となって「春重」名を与えられ、「春重画」の錦絵を刊行したが、明和7年(1770)6月15日の春信急死後、周囲に頼まれ二世春信として「春信画」署名の錦絵を制作したが、一年ほどで浮世絵界を去って宋紫石門に入った。しかし、その後も十年近く「蕭亭春重」と号して肉筆美人画を描いた、というものである。その見解(以下、「成瀬仮説」という)は筋道も通り説得力があるが、残念ながら仮説に過ぎず、裏付けを取るには至っていない。そして遂に今春、先生が逝去された。

私は、昨年から、浮世絵師時代の江漢について調べはじめ、成瀬仮説が正しいことをほぼ確信した。そして、その裏付けを取るのが私の仕事だと思った。江漢が版下絵を描いたと思われる錦絵は、従来の認識よりはるかに多く遺存し、「春重画」署名の錦絵は十数点、「春信画」署名の錦絵は研究者によって相違が出るが、それでも三十点以上残されている。成瀬仮説を立証するためには、第一に、「春重画」署名の錦絵が、春信在世中に作られたということを証明しなければならぬ。十数点全部が春信在世中に作られたということを証明できれば最高であるが、それが無理でも何点かでもそれが証明できれば、説得力を失う。次に、「春重画」署名の錦絵の制作期を、江漢による「春信画」署名の錦絵の制作期より前に置くことができることを証明でき

なければならない。成瀬仮説では、「春重画」署名から「春信画」署名に移行するが、二世春信襲名後も、並行して「春重画」署名の錦絵も制作刊行していた可能性もあるので、画然と分かれなければならないというものでもない。第三に「春重」署名、「春信」印を持つ肉筆画の解釈が問題となる。二世春信となったとすれば、画中に「春信」印を捺すのは当然であるが、「春信」署名とせずに「春重」署名とした理由を明らかにしなければならないのである。ただ、そのことについては、「江漢後悔記」のなかに、図らずも江漢自身の心境が吐露されているように思われる。自尊心の強い江漢は、初代鈴木春信の陰に埋没するのを嫌い、錦絵の制作を止めた後の安永期は、「春重」名で肉筆画を描き続けたと考えている。一方で、正当に二世春信を継いだと自負心、そして注文主の意向を反映する形で「春信」印を使い続けたのではなかろうか。安永後期に、春信・春重名を捨てて、「江漢」一本になった江漢は、そういう意味では晴れやかな気分になれたのではないかと想像している。

追悼の意も含め、成瀬仮説を証明する論文を今年中には書き上げたいと思っている。

最後になりますが、成瀬先生が大和文華館に勤務した期間等について記し、謹んで哀悼の意を表します。昭和6年(1931)10月16日生。昭和36年4月から大和文華館学芸部に勤務、昭和54年5月から館次長、平成11年3月退職。平成24年(2012)4月25日逝去。

季刊 美のたより No.179

平成24年 6月30日

発行 大和文華館